

インクルーシブなコミュニティ創成に向けた即興音楽の役割に関する研究（中間報告）

大阪市立大学都市研究プラザ特別研究員 沼田里衣

研究の背景・目的

本研究は、「関係性の音楽」という観点から理論構築と実践の場を往復することにより、音楽を用いたインクルーシブなコミュニティ創生のための技法開発・概念提示を目指すものである。

筆者は、障害者の社会参加の観点から、音楽療法やコミュニティ音楽の領域における即興音楽の役割について研究をしてきた。そうするなかで、即興音楽がもたらす対話の機能は、特に技術の優劣や価値観の差異を超えた音楽作りを行う際に有効であると考えているに至った。即興音楽は、音の中で対話をしながら互いの価値観を交換し、共に音楽とは何かという意味を新たに創出することを可能にする。一方で、音楽とは既に作られた自律的なものであるという捉え方が音楽教育を始めとして多くの場で採用され続けており、時に表現の自由を制限したり音楽嫌いを生み出し、楽器演奏の苦手意識から抜け出せないなどの問題も生み出している。多様な人々の共存を模索するコミュニティ創生の場においては、共に音楽を楽しむための別の捉え方が必要とされている状況にある。

こうした背景を元に、本研究では、音楽とは何かについて関係性の中で捉えるという視点に立ち、知的障害者を含むコミュニティにおける実践研究と共に関連諸領域の横断的な考察から議論を進める。

研究の方法

本研究は、2015年度より開始された筆者の科研費のテーマ「障害者の社会参加を目的とした音楽活動における音楽形態に関する研究」に加えて、その概念提示を目指そうとするものである。科研費研究では、障害者とそうでない者が参加する音楽活動において、物理的環境、社会文化的背景、人的リソース等の関連からどのように音楽形態が選択、あるいは創造されているのかを調査・分析し、具体的な音楽活用の手法を検討・提案することを目的としている。これに対し、本研究では、さらに音楽の即興性が持つ対話の側面に着目し、多様な関係性の構築をもたらす音楽のあり方について社会実験を行いつつ理論構築を目指すものである。具体的な方法として、①即興性を重視した実践を企画・実施し、②そこから得られた資料を収集・分析し、③その知見を元に音楽学、障害学、音楽療法やコミュニティ論などの議論を参照しながら領域横断的に研究を進める。以下、現時点におけるこの3つの方法の研究成果を報告する。

研究報告

①即興性を重視した実践

「音遊びの会」…2005年開始。知的障害者、音楽家、音楽療法家が、新しい音楽の地平を開拓することを目的にワークショップと舞台活動を展開。ドキュメンタリー映画の公開、NHKのEテレでの特集など

芸術・福祉の両面から評価を得る。月二回のワークショップと年数回の公演活動を継続しながら、技術や価値観の差異を超えた表現形態が模索されている。

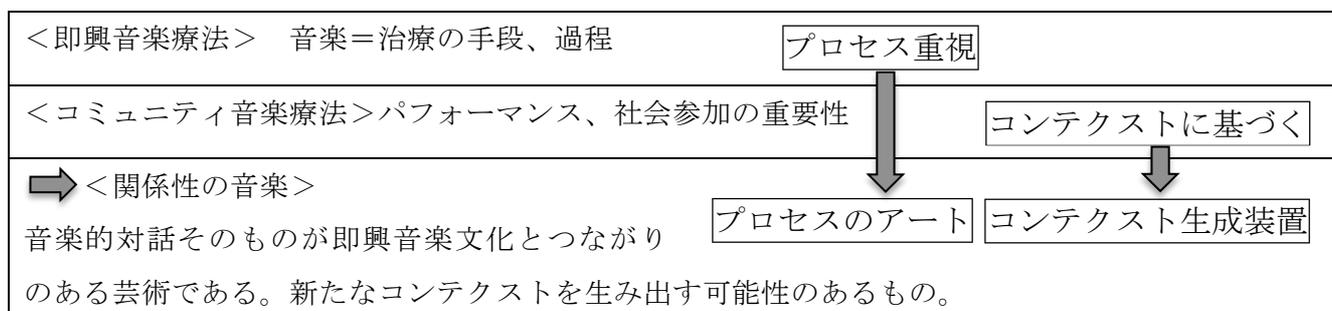
「おとあそび工房」…2014年開始。上記音遊びの会の実践をもとに、プロアーティストに頼らずコミュニティレベルで障害者を含むメンバーが同じ立場に立って表現を創作可能かという試み。音楽に特化せず、固定メンバーを作らない方法で即興表現を追求し、これまでに二回、舞台を行う。即興によるダンス・絵画・劇など多様な表現が創出されており、参加者の持つ文化的資源を生かす方法が模索されている。

②実践から得られた知見の分析

「音遊びの会」については、障害や福祉の境界を超えた関係性を即興による音楽対話によって考え続けるための社会実験の場という観点からまとめ、さらに、個々のメンバーの多様な立場からの視点を生かす形で本の発行に向けてまとめている。「おとあそび工房」の活動からは、「生の表現」と形容されることの多い障害者のアートを「演じる」という新たな視点から捉える視点が生まれた。今月7日、介護と演劇の相性の良さに着目し、認知症ケアに演劇手法を活かした活動を展開する菅原直樹氏を迎えて、工房参加者と共に「おとあそび工房公演振り返りの会 演じること～福祉現場と劇場の往復による作品作りを通して～」というテーマで研究会を実施予定である。

③領域横断的な視点から

障害者の即興音楽に関わる実践領域として最も近い領域は即興音楽療法、コミュニティ音楽療法であり、それらの領域における音楽の捉え方と本研究におけるそれは、以下の図に整理できる。



「関係性の音楽」は、音楽学のうち新音楽学と呼ばれる新たな議論をベースに民族音楽学などの諸理論、障害学のうち障害者の文化や美的価値観、それに伴う倫理観をどうとらえるのかに関する議論、アートを通じた社会の様々な人との関係性の構築の方法を検討するアートマネジメントの議論やアウトサイダーアートなどの障害者を含むアートに関する美術批評等が関連する。こうした諸理論と実践の場で生起する現象との往復から、現在の音楽文化へフィードバック可能な論点を炙り出し、まとめていく予定である。